

ZOE第12号目次

新入舎生自己紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
中澤重光さん自己紹介・・・・・・・・・・3
園芸活動/フィリピン留学記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
『同志少女よ、敵を撃て』紹介(読書会感想)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2月映画会感想・・・・・・・・・・・6
2022年度Y活動の振り返り・・・・・・・・・・・・フ
編集後記・・・・・・9

新入舎生自己紹介

早稲田大学創造理工学部建築学科3年 増山朋華

初めまして、ますやまともかです。菅家結さんに次いで2人目の「建築学生」です。そこを少し深堀して、私の建築学科との出会い・今・(建築の魅力・)これからを、ざっとまとめたいと思います。まずは出会いです。高校2年時、オープンキャンパスにて建築学科の活動に触れ、謎にそこで楽しそうに過ごす自分の姿が未来からフラッシュバックされました。なんだか地獄のように大変だという噂も耳に挟みましたが、後は野となれ山となれ精神で、直感を信じ即決で進学を決めました。

実際入ってみると、想像の10倍は、決して甘くない世界でした。建築学科は、建築愛に狂った変態集団です。人が造ったとは思えないほど繊細で美しい模型をつくるけれど、足の踏み場のない作業場でゴキブリと暮らします。みんな賢く戦略的ながら、圧倒的低コスパでお金と時間を消費します。寝不足で死にそうな顔をして限界を生きているような時が一番、輝いていたりします。加えて一人一人の我が強く、かなりの競争社会で、つい学科内の空気がギスギスしてしまうことも少なくありません。みんな本当によく頑張っています。そのような環境で3年間様々な経験をし、私もようやく我が道を行く強さが身に付いてきました。最近は悟りを開いたかのように、自分のペースで建築と向き合えています。

客観的にみると建築学科は、聞いて地獄見て地獄といわんばかりの確かな過酷さがあります。ですが、それを凌駕してしまうほどの魅力が建築にはあります。私もまた、その建築という広く深い沼のような学問に魅了された一人です。建築というアウトプット方法があるからこそ、いろんな経験や知識を会得し自分の世界を広げたいと思い続けることができます。人間、自然、都市、、、広範囲と複雑に絡み合うが故に建築の可能性は無限大で、それに伴う責任も大きく、勉強をしても、し足りません。有形なものから無形なものまで、意図的事象から偶発的事象まで、1つの建築に込められる背景は壮大で、未熟ながらも1度自分の考えを建築として世界に共有し、提供することは、とても楽しくロマンがあります。

こうして自分のかいた文章を見てみると、なんだかんだ私もしっかり、建築愛に狂った変態集団の1人なのかもしれません。諦めて私も「建築大好き人間」として生きたいと思います。建築という学問と、それを通した多様な出会いに感謝し、生涯大切にし続けたいと思います。そしていつか、自分の知識や経験を活かし、他分野の専門家と協力しながら、誰かのためになる建築をつくりたいです。

中澤重光さん自己紹介

はじめまして! 昨年10月より信愛学舎と関わりを持たせていただいております、中澤重光と申します。アメリカ福音自由教会リーチグローバル(英語名: Evangelical Free Church of America ReachGlobal)という米国ベースの宣教団所属の宣教師です。昨年夏過ぎに早稲田教会の古賀先生や早大YMCAの渡邉理事にお声がけいただき、以来毎週金曜日朝の聖研や、月例、夜の聖研などに参加したり、また舎生の皆さんとも個人的に食事などしながら、少しずつお知り合いにならせていただいていること、とても嬉しく思っております。

結婚25年近くになるアメリカ人の妻ルアンLuannとの間に4人の子供(恵21歳、重知18歳、実喜16歳、恵矢14歳)がおります。このようにアメリカとの繋がりの多い人生ですが、自分自身は祖父から三代東京の江戸っ子です。荒川区西日暮里の、中華料理店を経営する両親のもとで育ちました。高校からは陸上部に入り、槍投げでインターハイ入賞したりもしました。そのまま大学でも槍投げを続け、いつかは日の丸のユニホームを着たい、との夢に向かって突進していた中、大学3年生の時に知り合ったアメリカ人宣教師を通してイエス・キリストと出会いました。この出会いが、自分の人生の方向性を決定的に変えるものとなり、それから28年ほど経った今も感謝の気持ちは自分の中で深まっていく一方です。

もう少し自己紹介を続けさせていただきますと、日本での就職に魅力を感じることができなかった中、思わぬところからふと与えられた機会を通して、中東・オマーンの小学校で現地の子供たちに体育を教えるという経験を大卒後1年半ほどさせていただきました。その後、数年かけてカリフォルニア州の大学で聖書を学んでから、神様に導かれてトルコ共和国で宣教師として10年近く活動しました。そしてまた神様の導きにより、東日本大震災の年である2011年にトルコから帰国し、宣教活動の拠点を東京に移して今に至っています。現在、10名ほどからなるアメリカ人宣教師チームのリーダーとして仕えているほか、4つの「スモールチャーチ」からなる教会ネットワークの世話人をしています。

隣の友愛学舎では5年ほど前より関わりを持たせていただいており、これまで合同礼拝などで信愛の皆さんとも時々接点がありましたが、これからもう少し継続的にご一緒に歩ませていただけることを嬉しく感謝しております。微力ではありますが、少しでもお役に立てれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

園芸活動の再開

2023年度から園芸を再開することとしました。今年度はその準備として裏庭の土づくりから始めています。草むしりから始まり、土を耕し、正面玄関のオリーブを伐採し、花と肥料類を買い、とりあえず花壇に花を植えました。今回の表紙写真です。綺麗に耕した裏庭の畑にはこの夏、夏野菜やハーブを植えようと思います。また、研究室でもらったチューリップも最近芽を出し始めました。チューリップは大水のみと聞いて、毎日水やりをしています。しばらくいなくなるから、舎生のみんなが水やりをしてくれますように!

フィリピン留学記

フィリピンに来て1週間が経とうとしています。まだ1週間ですが、締め切りもあることだし、来てすぐのほやほやな感想を書いてみようと思います。6週間滞在予定ですが、なそもそも修士1年が終わるこのタイミングでなぜフィリピンに6週間なのか。まずはそれを説明しましょう。この1年、私にとって研究室の仕事と就活に追われたマルチタスクな忙しい1年でした。ですが、就活も終わった今、比較的まとまった時間の取れる期間があり、かねてよりやりたかったダイビング、夏のヨーロッパに向けての英語学習、聖書の学びなどができるフィリピンへの渡航を決めました。

実際に行ってみると、そこには懐かしい風景が広がっていました。ブゥゥゥゥとなるバイクの喧騒、埃っぽい排気ガスの匂い、番の鶏が飛び跳ね、ビビットな花が咲き、雑多に人や物が溢れている道。東南アジアは、インドネシアに5年前行ったけど、それを除けば15年ぶりです。ちなみに思ったより全然暑くありません、むしろ涼しくてとても快適です。体調も全く問題ありません。めちゃ蚊に刺されることぐらいです。

お世話になるのは両親の知り合いで、フィリピンで教会開拓をしている方。ちょっとした集会所を中心とした部屋の周りに寝室やトイレがくっついている教会に、両親と子供4人、住み込みの学生が2、3人、そしてガチョウや猫や鶏がそこら中を闊歩しているお宅です。私は「祈りの部屋」に寝泊まりしており、扉の上部と両脇に羊の血が(多分絵の具だけど)塗られています。これは、聖書の出エジプトに出てくる過越の祭りで行われた儀式の真似ですが、初めて見た時(到着したのは深夜だったので翌朝気づきました)なんて聖なる部屋なんだと思わず笑ってしまいました。生活は日本のようなクリーンさはないけれども、ホスピタリティ溢れた温かくおおらかな最高の国です。

つい先日、初めての日曜を迎えました。礼拝の後、若者たちがこぞって集まってくれて、恥ずかしがりながらも英語で話そうと頑張ってくれる姿にとても感動しました。そもそも、私は英語が公用語のフィリピンではみんな英語がペラペラだと思っていたのですが、どうやらそういうわけではないようです。そしてフィリピン人は思ったよりもシャイで、英語が話せなくて恥ずかしいという感覚があるみたいです。英語を話せる人に囲まれ、かつシャイな性格だった私にとって、その気持ちはとてもよくわかり、一気に親近感が湧きました。そして、私は肌の白さと金髪のせいでどこに行ってもとても目立つみたいです。こんなに異国人扱いされるのは久しぶりでとても面白いです。

私は、海外経験は比較的多い方です。アジアはもちろん、ヨーロッパや南半球などいろんなところに滞在していて、あまりカルチャーショックを受けたことはありません。そんな中でもとても印象的だったのは、フィリピン人の明るさといいますか、打たれ強さ、しなやかさです。教会には、17歳や19歳の女の子や男の子も住んでいて、よく話すのですが、彼らはなかなか波瀾万丈な人生を送っています。女の子の父親は感電で自殺をして、彼女がその第一発見者だそうです。ところがホストファザーに当たるガムさん(牧師)はそれを爆笑しながら私に冗談と爆笑を交えながら話していて、びっくりしました。他にも結婚式直前の新郎が亡くなった話や、近所の壮絶な捨て子の話など、永遠と笑いながらジョークを交えながら話してくれて(そもそも私は冗談への反応速度が遅い方です

が)戸惑いながらもこのメンタリティは是非とも日本に輸入したいと感心しました。日曜の礼拝の後も家庭集会と言って家を回って18歳の男の子がメッセージらしきことをして伝道していたり、何かと勢いや力強さを感じます。かと言って愚鈍などでは決してなく、繊細で細やかに気を遣ってくれます。なんかもう本当に感心します。子供たちも大人な考え方を持ち、素直な可愛らしい子たちです。メッセージからも福音伝道への強いパッションを感じます。

私がカンボジアにいた時の小さかった頃を知ってくれている人たちと、昔の話をしながらフィリピンでの生活を過ごしていると、かつての追体験をしているかのような不思議な気持ちです。食べ物も、15年間思い出すことのなかったものがあったり、フルーツをたくさん食べて、料理の違いの話をしたり、賛美したり恵み溢れた生活ができています。1週間でも学ぶことや思い出させてもらえたこと、懐かしさと感動をたくさんもらいました。早くももうあと残りの5週間、有意義な時をもてること、とても楽しみです。



▲これは、ホストファミリーの子供たちが料理を手伝っているシーンです。

今回の読書会は、2022年の本屋大賞を受賞しベストセラーとなった『同志少女よ、敵を撃て』を、遅ればせながら扱った。参加者は当初の予想に反し、いつもの2名であった。事前のアンケートによると読んでみたいという人は多かったはずなので、あまりネタバレはせずに紹介に留める。

本作品は、第二次世界大戦中にナチスドイツとソ連の間で勃発した独ソ戦を、ソ連側の一人のスナイパーとその小隊を軸に描き出している。スナイパーという視点から描き出される戦場、兵隊生活はなかなか新鮮で刺激的だ。スナイパーは他の兵種の兵士よりも、敵からの嫌悪と憎悪の対象になり、味方からもあまりいい目ではみられない。それは、スナイパーが身を潜めつつ、対象を撃ち殺すからであり、他のものからしてみれば、自分の身を敵に晒さずに戦果を挙げる卑怯者であり、敵からしてみれば、視認できない場所から味方を次々に射殺していく悪魔のような存在である。しかしスナイパーはそれだからこそ、精神の酷使を必要とする。戦場で気づかれないように人間を撃たなければならないにも関わらず、感情を最小限に、ほぼ無の境地にまで持っていかなければ、その感情の揺れが指を通して銃身のブレを生み、当たらないどころかこちらの所在を示すことになってしまう。スナイパーにとって自分の居所を知られるということは死を意味する。さらにスナイパーはその精神的集中を一人で行わなければならない。仲間とともに関の声を上げながら突撃していく銃弾の飛び交う血生臭い戦場の雰囲気からはかなり遠いところにいるのがスナイパーである。

そして主人公の所属するスナイパーの小隊は、全員が戦争で家族や故郷を奪われ破壊された 少女たちであり、民族や出自も様々である。いうならば孤独な者たちの集団である。それぞれが 戦争の目的をそれぞれの位置に置き、戦うことでしかそれを達することができないと考えている 人間たちである。つまり、ソ連という一体性からも遠く離れたところにいる。ソ連のために彼女たち は戦っているのではない。では何が彼女たちをして苛烈な戦場に赴かせているのかは読んでほ しい。

そしてこれがかなり重要な問題であるが、表題でもある「同志少女よ、敵を撃て」が一度だけ本文中で使われる。いつ、どのような場面で使われるかを見定めてほしい。「敵」とは誰か、何か。その問題提起に、単なる歴史物のフィクションを超えて現代日本でヒットした理由が隠されているだろう。小説はフィクションの世界を通して、それを反転させ、現代社会を問い返す力がある。この小説にもその力は確かに宿っている。

次回の読書会は遠藤周作の『深い河』とのこと。

2月映画会感想

下山航輝

2022年度最後の映画会では『レインマン』(1988)を見ました。今回は私と伊藤さんの2名のみが参加しました。自閉症の兄と莫大な借金を抱えながらも兄と放浪する内に家族の愛に目覚めていく弟というコンビをダスティン・ホフマンとトム・クルーズが見事に演じあい、特に兄を病院に見送る静謐なラストシーンはとても印象的でした。実は中学生の頃に本作を見たことがあるのですが、その際はカジノで無双するシーンばかりが記憶に残っており、記憶力がすごいなーという感想を持ったのですが、改めて観てみるとカジノのシーンは後半の30分ぐらいでそんなに長くないのが驚きでした。

次回の映画はまだ決まっていませんが、信愛のみんなにとって観てよかったと思える映画を観 たいなと思います。 2022年度も数多くのYMCA活動を行いました。今回は2022年度最後の『ZOE』ということで今年度のY活動を振り返って行きたいと思います。

聖書研究会

聖書研究会は朝の聖書研究と月1回の聖書研究会を昨年度に引き続き行いました。朝の聖書研究会は前期は参考書を使って聖書の概要を把握しました。後期はYoutubeのバイブルプロジェクトという聖書の解説動画を参考に毎週発表者が「ルカによる福音書」を少しづつ解説するというスタイルで通読しました。

また、月1回の聖書研究会については上級生と下級生の2人ペアが基本となって、聖書研究の やり方を伝えるという方法を取りました。これは今年度に新たに作った聖書係が発案したもので、 キリスト教や聖書を知らない新入生にどうやったらわかりやすく聖書のことを教えられるかという 工夫をこらしたものです。このペア聖書研究は一定の成果があったのではないかと思います。 来年度は中澤さんに手伝ってもらいながら、よりよい聖書研究会のやり方を模索していければ いいなと思っています。

読書会

昨年度に引き続き、2か月に一度ぐらいのペースで読書会を行いました。毎回数名の参加者がありコンスタンスに実施できたのではないかと思います。読んだ本は以下の通り。

5月・・・夏目漱石『こころ』

7月・・・井伏鱒二『黒い雨』

9月…『日本近代短篇小説選 昭和篇1』

11月・・・伴名練『なめらかな世界と、その敵』

1月・・・逢坂冬馬『同志少女よ、敵を撃て』

3月・・・遠藤周作『深い河』(予定)

映画会

昨年度に引き続き、月1度ぐらいのペースで映画会を行いました。秋ごろには『ハリー・ポッター』 シリーズ、1月には『レインマン』を観ました。

園芸活動

今年度の終り頃、つまり2023年の年明けですが学生委員の菅家さんが中心となって信愛学舎の 裏庭の空きスペースを使って園芸活動を再開しました。この活動は去年、つまり2022年に松村さんが頑張って続けていたのですが、彼女の卒舎後に引き継ぐ人がおらず1年間放置されていました。2023年度は菅家さんが中心となって取り組んでくれるそうです。今から夏野菜の収穫や季節の花々が咲くことが楽しみです。

世界文化交流会(仮)

こちらは正式な活動ではありませんが、舎生同志の交流を深めるためにボードゲームを中心とした娯楽活動を行いました。特に決まった活動があるわけではないですが、人狼ゲーム、麻雀、映画鑑賞会などを不定期で実施しました。

夏合宿

今年度は8月17日から2泊3日で広島に行きました。主に広島市内で原爆と戦争の実際とその際に活動したキリスト者について学びました。広島の隣、呉では大和ミュージアムで旧海軍について学びました。幸い天気にも恵まれて舎生にとっていい思い出になったようです。合宿の感想は「合宿文集」としてまとめてありますのでそちらをご覧ください。

OBOG総会

ーー月二七日(日)に三度目のOBOG総会を開催しました。早稲田大学一九八七年卒の後藤百合子様をゲストとしてお招きし、会社員・フリーランスを経て実家の製造業を継がれ香港や中国というアジア圏でいかに事業を展開し、YMCA活動で得た経験をどう生かされたかを石垣島からオンラインでお話し頂きました。対面、オンラインの参加者があり盛況となりました。(一年 川崎眞菜、『信望愛』105号より抜粋。)

2022年度学生YMCA活動振り返り(3年 手束響希)

同盟YMCAの今年度の活動としては、春のオリエンテーション、冬のオリエンテーションを行いました。春のオリエンテーションでは、各大学YMCAの新入生が多く参加したようでした。冬のオリエンテーションでは、12人と少人数ではありましたが、レクリエーション、聖書研究と少ない人数だからこそ話しやすく、参加したメンバー同士の距離がすぐ、縮まっていくのを肌で感じることが出来ました。ンテーションの担当を担わせていただきました。立教YMCAの方と協力し、聖書に触れたことがない人にも、分かりやすい聖書研究となるよう努めました。また、来年度も、春のオリエンテーション、冬のオリエンテーションがあるので、積極的に準備を行っていきたいと思っています。

まとめ

このように今年度も数多くのY活動を行うことが出来ました。しかし、活動が寮内だけに限定されてしまっているのも事実です。実際、舎生の中にはボランティアをやりたいと思っていたけれども信愛では出来ないという声もありました。来年度はボランティアなど信愛学舎の外部での活動にも手を広げていきたいと思っております。そのためには理事や評議員の皆様、そしてOBOGの皆様の協力が不可欠です。是非ともご支援、御協力のほどよろしくお願いいたします。

編集後記

久しぶりに『ZOE』を出すことが出来ました。今年は新入舎生が4名も入舎して寮としてのあり方が何度も問い直された一年間だったと思います。残念ながら、1年生の上山君は卒舎してしまいますが、4月からは新2年生の久保さんを迎えて新しい寮生活が始まります。私自身、大学院を卒業し社会人になります。2023年度はアドバイザー(仮)として信愛との関わりを持たせていただきます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。(S)

今年度も様々なことがありました。今年の舎生は例年より忙しくそれぞれが色々なコミュニティに属していく中で学生生活の中で寮のポジションをどこに置くか思考していたように思います。次年度は最後の一年になります。良き締めくくりの一年となるように頑張りたいと思います。(S)